TAKE FREE

SM+ vol. 07

北海道教育大学岩見沢校　卒業生へのインタビュー

+美術館 学芸員

山田 菜月 YAMADA NATSUKI

Topics

いつもそばにあった美術
巡り巡った美術館、得た気づき
学芸員を志すきっかけ
伝わる展示を目指して
北教大岩見沢から、その先へ

ZAWA＋について

2020年より、新たに始まったi-BOXのシリーズ企画「ZAWA+」。本展では岩見沢（ZAWA）から飛び立った、卒業生のその後と現在（＋）をご紹介します。岩見沢校が現在の芸術・スポーツを学ぶ大学に形を変えてから10年以上が経過しました。これまでに岩見沢の地を巣立った卒業生たちは、社会経験を積みながら近年、活躍の幅を広げつつあります。教員、会社員、クリエイター…様々な進路に進んだ卒業生たちは、今一体何を考え、何を作っているのでしょうか？「ZAWA+」では、社会とかかわりながら、自らの作品を作り続ける卒業生の皆様をご紹介します。

vol.07

＋学芸員

山田菜月

ヤマダ ナツキ

山田菜月30歳。北海道旭川市生まれ。マンガ好きな両親のもとで、ピカソの絵本を読んで育つ。

中学・高校では吹奏楽部に所属しチューバを担当。部活では、仲間と一緒に何かを成し遂げることの楽しさや大変さを味わう。

高校生の時に盲学校での演奏会に参加し、そこで出会った視覚障害者が描く作品に感銘を受け、絵を描くことよりも〝美術と人を繋げる仕事がしたい〟と思い、制作側ではなくマネジメントを学ぶため北海道教育大学岩見沢校 芸術課程芸術文化コースへ進学した。

進学後はアートマネジメント美術研究室に所属し、「川俣正 北海道インプログレス」(岩見沢・三笠)や「北海道・北東北 アール・ブリュット展」(北海道・青森)など、数々のイベントに参加。さらにフランスやスペインを含む、国内外の約100もの美術館へ訪れ、〝美術館オタク〟として各地を巡っていた。大学院在学中に市立小樽美術館へ就職、現在も同美術館にて学芸員として活躍している。

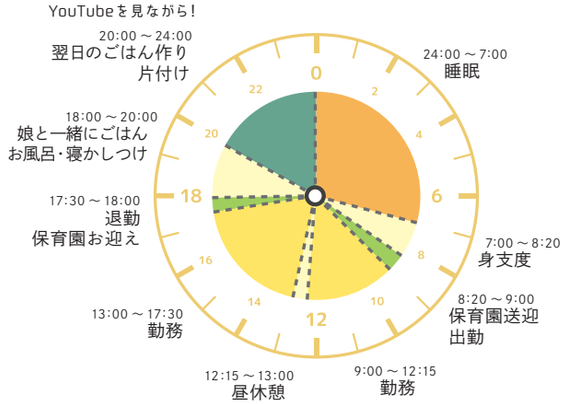
好きなものは美術館、ミスドの箱、食べたことのない味のアイスを食べる

ヤマダさんってどんな人？

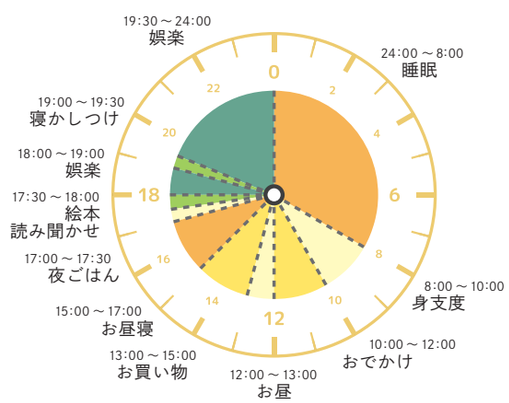
HITOTONARI SPACE

Q.1 ｜ ヤマダさんの一日

【平日】



【休日】



Q.2 ｜ ヤマダさんの5カジョウ

- ＋ 迷ったら、勇気のいる方！
- ＋ なりたい自分ならどうするか考える
- ＋ 夢は諦めなければかなう
- ＋ 楽しそうに働く
- ＋ 私は私のままで努力する

Q.3 ｜ 現在のお仕事

2022年度 開催 特別展
「美術館×やさしい日本語　やさしさとは？」チラシ

小樽市立美術館の学芸員として、主に収蔵作品の保管や展覧会の企画運営をしています。

展示会場では、来場者へ作品解説や作家を交えてのギャラリートークも。

アートマネジメント美術研究室で行った青森の十和田市現代美術館のアート広場。

アートマネジメント美術研究室のゼミ旅行で訪れた東京都現代美術館にて。

（写真左）アートマネジメント美術研究室 三橋純予先生。卒業式にて。

アートマネジメント美術研究室での思い出。

いつもそばにあった美術

―幼いころはどんな子どもでしたか？

保育園の時からピカソを題材にした絵本を読んでいました。その絵本に出てきた絵のことをすごく覚えていて、大学2年生の時にスペインのピカソ美術館で本物を見たときは「これじゃん！」と思いましたね（笑）

父が木に関わる仕事をしていることもあって、小さい頃から木の彫刻や玩具に触れる機会が多く、家の近くにある美術館にも両親とよく行ったりしました。

絵を描くのも好きで、図工や美術の時間は割と得意だった方です。保育園の時の絵が今でも実家にありますが、保育園児にしてはすごく上手で驚きました（笑）

―幼い時から美術がそばにあったんですね。描く側ではなく学芸員を志すきっかけは何だったのでしょうか？

絵を描くことが好きだったので美大への進学も考えたのですが、どうしても個人練習が苦手でデッサンの練習に意欲が持てませんでした。

そんな時に、高校の吹奏楽部の活動で盲学校を訪れる機会があり、校内に展示されていた生徒さんの書道や写真がすごく良くて驚きました。誤解を恐れずいうと、初めて目の見えない人と会って話をして、「感じていることや考えていることは私と変わらないんだ」という新鮮な発見がありました。

この経験から、一人で黙々と絵を描いたりすることよりも、自分の好きな音楽や美術を通して人と関わることに興味があるなと感じ、誰かと一緒に何かを成し遂げることの方が得意だし芸術と人を繋げる仕事がしたいなと思うようになりました。

学部時代　～巡り巡った美術館、得た気づき

―北海道教育大学岩見沢校への進学を決めた理由は何でしょうか？

当時の北海道教育大学岩見沢校芸術文化コース※1には『芸術と社会の架け橋になる』といったスローガンが掲げられていて、「私のやりたいことってこれじゃん！」と思い進学しました。

入学した時点で、好きなことを突き詰めたプロのような人がたくさんいて、「私よりも変な人がたくさんいるんだ～」と安心したのを覚えています。

美術をちゃんと勉強し始めたのは、大学に入ってからです。そこからさらに美術館に興味を持ったのは、後の担当教員であるアートマネジメント美術研究室の三橋純予先生の授業で『夏休みに美術館に行く』という課題がきっかけでした。

東京の美術館に行ったのですが、東京の美術館は北海道にある美術館のイメージとは違って、絵をじっくり見ている人だけじゃなく、みんな作品を前に思い思いの過ごし方をしているんです。美術館って、どんな人でも気軽に美術作品にアクセスできて、様々な人が同じ作品を鑑賞している場所なんだな、と感じました。

そこから美術館にハマって、鬼のように一人で美術館に行く生活が始まりました。

―鬼のようにですか（笑）

多分大学4年間で100箇所くらい行ってます（笑）

学部生時代に「芸術プロジェクト」という授業でフランスやスペインにも行きました。

ルーブル美術館で《ミロのヴィーナス》をいろんな国の人が見ていたのですが、中国の方は最前列で鑑賞、韓国の方はミロのヴィーナスと自撮り、日本人は割と解説の人の話を真面目に聞いていて、現地の方は遠くから作品を模写している。みんなで一つの作品を見てるのに、いろんな見方をしている人がいて、それぞれ違うことを考えていそうなのに、一様にミロのヴィーナスのことを素晴らしいと思っている…。東京の美術館での経験もあって、「美術館って不思議だけど面白い場所だ！」と感じました。

YAMADA'S ART TRIP!

山田さんが学部生時代に訪れた
思い出の美術館や芸術祭

1

3

2

5

4

―お話を聞いていると、美術作品だけでなく美術館という空間もお好きなんですね。

私、美術館に来る〝人〟が好きなんです。逆に、「美術館に来ない人」、あるいは「美術館に来るのが難しい人」が美術を楽しむにはどうしたらいいのだろう、と学部時代に考えていました。

そんな時、高校時代の盲学校での経験もあり、視覚障害者の作品鑑賞について興味を持ちました。視覚障害者の鑑賞方法の一つとして、見える人と見えない人が対話しながら鑑賞する方法があります。見える人が描かれているものや色、質感などを伝えるのですが、絵を客観的に言葉で説明するのは案外難しいんです。でも、作品を通して対話を重ねて、共感したり、お互いの違いを知ったり、見えていなかったものが見えたりします。言葉で伝えることの難しさを含めて鑑賞の楽しさに繋がっているんですよね。

絵は見えていても見えていなくても、それぞれが感想を言い合って楽しめるものであると私は考えています。見えない人を特別な人のように捉えるのではなく、みんなが同じように楽しめる心地よい場所に、美術館がなってほしいと思っています。

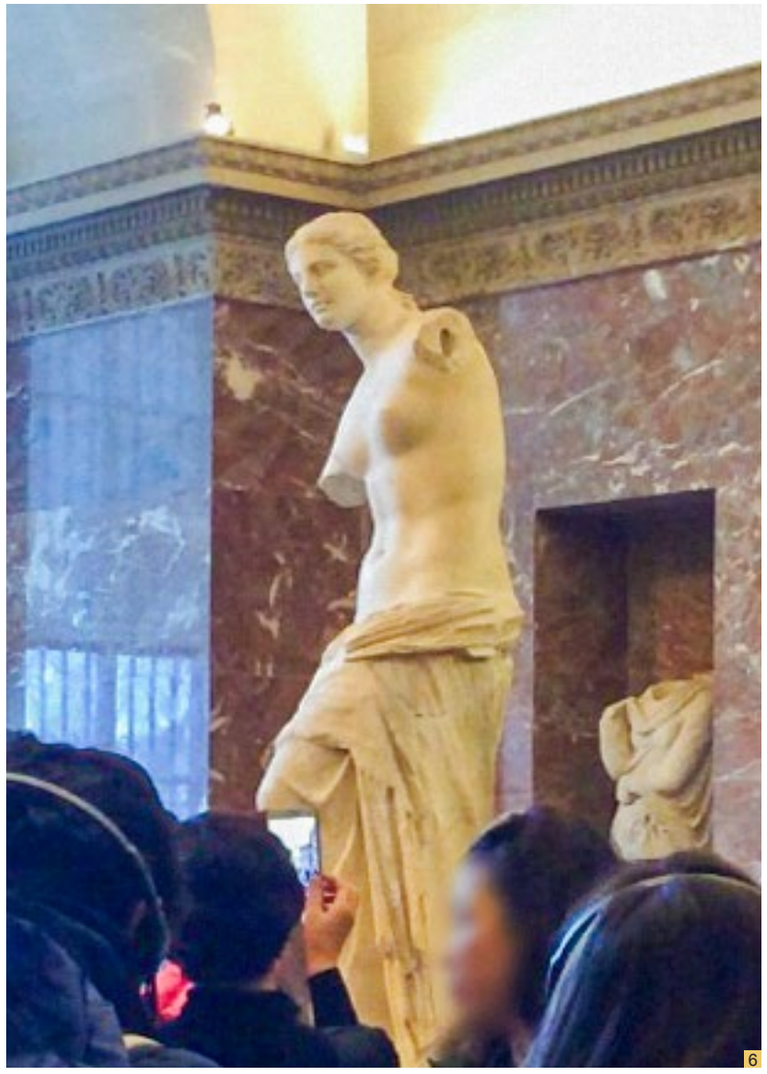
現在、「見えない人」と「美術館」という分野は、発展途上で十分な研究がされていません。しかし、多様性やアクセシビリティ※2といった視点が先行して広まったことで、「見えない人」と「美術館」の間で、お互いが求めるものの齟齬が生まれていると考えています。修士論文では、その齟齬を含めて、私が実際に経験したことを踏まえて論文を書きました。

大学院へ ～学芸員を志すきっかけ

―大学院に進もうと思ったきっかけは何でしょうか？

美術館がすごく好きだったので「自分もここで働けたら」という気持ちがありましたが、一方で学芸員という狭き門に、好きという気持ちだけで挑んでいいものか？とも悩みました。そのため学芸員を目指

※2. 利用しやすさ、近づきやすさの意。


6

1 台湾の台中市にある彩虹眷村にて。（軍人村にあった住宅に、住人のおじいさんが絵を描き始めたことから、今では観光地になっています。作者のおじいさんにも会えました！）

2 卒論の合間のギチギチの日程で壽﨑さんと行った瀬戸内国際芸術祭。（ギチギチすぎて夜についたけど嬉しくて撮った写真。）

3 東京オペラシティアートギャラリーの「ジュリアン・オピー展」をみに行ったとき。（友達と美術館に行くと写真を撮ってもらえる！）

4 フランスのポンピドゥー・センターにて。（今の私でもう一度行きたい美術館です。）

5 フェルメールの《真珠の耳飾りの少女》が収蔵されているオランダのマウリッツハイス美術館にて。（本物の真珠の耳飾りの少女はすごく“ウルウル”していました。）

6 フランスのルーブル美術館にて撮影した《ミロのヴィーナス》。

大学院時代にお世話になった札幌市視聴覚障がい者情報センターのみなさんが展覧会を見に来てくださったとき。

初めて担当した展覧会「絵画のなかの登場人物」展にて。関連事業のバレエコン

市立小樽美術館（小樽市色内1-9-5）

して大学院への進学を視野に入れつつ、就職活動も並行して行っていました。

そんな時関西へ企業説明会に行く機会があり、「せっかく関西に来たのだから」と就活の合間に関西の美術館を巡りました。そしてその時ちょうど大阪の国立国際美術館で開催していた〝境界／ボーダーを越えて―未来の学芸員のために―〟という講演会を聴きに行きました。

その講演会は、教育普及活動の終焉、ケアの場としてのミュージアムといったかなり〝尖った内容〟で、新進気鋭の学芸員が多数登壇されていました。そこで、自分が思い描いていた学芸員像とは違い、学芸員にもいろんな人がいることに気づかされました。

講演を聴き「こんなにもいろんな考えの学芸員がいるのなら、私も学芸員を目指してもいいかもしれない」と思い、その日のうちに母に電話で「大学院に進むから就活やめるね」と伝え、そこから本格的に学芸員を目指し始めました。

―担当教員の三橋先生とのエピソードを教えてください。

私は元々楽観的ではありますが、自己肯定感はそんなに高い方ではありませんでした。高校～大学時代前半は、周りの目を結構気にするタイプでした。「もっと頑張んないとダメだよ」とか「今のままじゃダメだよ」と言われると、割と真に受けてしまったりして…。結構クヨクヨしてたんですけど、三橋先生はいつも「山田さんは今のまま頑張りなさい」と、私のことを認めてくださいました。

この言葉を頂いたからこそ、私は自分の好きな道に進むことができたのだと思います。今は嫌なことを言われても、「私はそんなふうに思わないんですけどね～」と思えるようになりました。

―学芸員になるためにはどんな勉強をされましたか。

大学院入試の時に美術史は一通り勉強して基礎知識を付けました。でも、勉強しないといけないことは美術館に勤務し始めてからの方がずっと多いです。

自分のテーマを客観的に考えるために、美術史を学ぶことはもちろん大切です。けれども、学生時代は自分の興味がある研究テーマを見つけて、継続して勉強することこそ一番大切な気がします。学芸員は研究職なので常に勉強し続けないといけません。もし、自分が興味を持ったテーマを勉強し続けられるなら、その人は学芸員に向いていると思いますね。

学芸員として　～伝わる展示を目指して

―現在のお仕事について教えてください。

市立小樽美術館で6年前から学芸員をしています。約3000点ある収蔵品をどのように並べたら面白いと思ってもらえるかを考えながら、展示を企画したり、子どもたちに作品の解説をしたりしています。

作品や制作活動について調査に行ったり展覧会の打ち合わせをしたりと、よくある学芸員のお仕事もしながら、展示室の受付でチケットにスタンプを押す仕事もしています。普通は学芸員がそんな仕事をすることはないんですけど、受付に座っていると来館者の感想が直接聞こえてくるので、私はとても楽しいです。美術館が親切な場所だったな、また来たいなと思ってもらえるように、来館者の方にはなるべく柔軟に対応するよう心がけています。

―山田さんが企画された展示を教えてください！

最近ですと、2022年に「美術館×やさしい日本語　やさしさとは？」という展示をしました。「やさしい日本語」とは、普通の日本語よりもわかりやすい言葉のことです。例えば、外国人や手話を使う人など、日本語が第一言語ではない人にも伝わりやすい日本語のことを指します。

私は自称・美術館オタクなのですが、それもあってか、気を抜くとつ

岩見沢在住の中道章子さんの作品も展示しました。

上中文江さんの作品。全道を調査し、福祉事業所から10名の作品をお借りしました。

品なんかいいな」と鑑賞してくれる方がいらしたら、どんなに自分が詳しい分野でも専門用語を多用せずにお話するよう、気をつけています。

　現在（インタビュー時点）市立小樽美術館では、『障がいのある人と、アーティストと、私たち「表現する」ということ』※3を開催しています。この展覧会は美術館学芸員（すげさきことね）としての目標の一つで、大学時代に関わっていたアール・ブリュット※4の展示をやってみたいとずっと思っていました。アール・ブリュットの展示は北海道の美術館でも何度か開催されていますが、福祉団体ではなく美術館学芸員が一から調査した展示はあまり前例がありませんでした。そこで、美術館で働く私と、ゼミの[illegible]社会福祉人で学[illegible]崎琴さん[illegible]を[illegible]い、[illegible]調[illegible]業[illegible]に[illegible]もの[illegible]品を見て[illegible]回の展[illegible]ではその中からピックアップした

※3. 会期：2024年1月8日（月・祝）～3月17日（日）開催

い難しい専門用語を使ってしまいます。だからこそキャプションや解説を考えるときは、誰にでも伝わる言葉で伝えられたらいいなと思い、やさしい日本語を研究している先生にご協力をお願いして、「やさしい日本語」と美術館のコラボ展示を実施しました。

―現在学芸員としてはどのような研究をされていますか？

　学芸員として就職するにあたって北海道の美術史は学びました。小樽は北海道の美術史の中でとても重要な地域なので、日々実践的に学ぶ環境があります。一方で、展覧会をやると決まったら、一から勉強しないといけないことも多いです。でも、逆に一から勉強するからこそ伝えられることがあると思っています。私自身が専門的な中身を噛み砕いて理解したからこそ、わかりやすく人に伝えることができるのではないか、と考えています。

　たとえば、お客様はだいたい美術史のプロではありません。「この作

※4.「生の芸術」を意味するフランス語。「正規の美術教育を受けていない人による芸術」の意があり、現在の日本では特に「障害者の表現」についてを指す。

ロゴについて

卒業したあとどんな仕事をしていても、生活をしていても、大学で学んだことや、大学の仲間たちと過ごした時間は生かされている。どんな経験も、この先の自分につながっていく、という意味を込めて、「ZAWA+」の文字を一筆書きのようにつなげました。また“人生山あり谷あり”というイメージに合わせ、丸みを帯びたデザインにしました。

ZAWA+ vol.07 山田 菜月「あのときの美術館」

会期：2024年10月30日（水）～11月11日（月）

時間：10：30～12：00、13：00～17：00（※最終日は15時まで）

会場：北海道教育大学岩見沢校 BOX［i-BOX］
＋有明交流プラザセンターホール
岩見沢市有明町南1番地1　JR岩見沢複合駅舎　有明交流プラザ2階
入場無料

企画：北海道教育大学岩見沢校 BOX［i-BOX］
煤田真実／立花優果／尾崎芳子／中島聡一朗
小笠原千香／鈴木隆司／山本遥香／和田明日香

岩教の、その先へ

―大学で学んだことは今のお仕事にどう生かされていますか？

「美術を学ぼう」、「学芸員を目指そう」となったときに、周囲からは「美術なんてつぶしがきかない分野じゃなく、もっと一般的な仕事につきなさい。」と言われたこともありました。

北海道教育大学岩見沢校という美術専門の大学を目指す時にも「もっと進路の選択肢が多い学校に行った方がいい」と言われましたし、学芸員になろうと決めたときも「あなたの学歴じゃなれないよ」ときついことを言われました。

ただ、大人になって思いますが、夢見る若者に対してそういうことを言う人のことを、必ずしも信じなくてもいいんじゃないかと思います。学生さんの中でそんなことを言われている人がいたとしたら、気にしなくて大丈夫ですよ、と伝えたいです。

好きなことを学び、仕事にするために、進路を選択した自分を信じて進んでください。私は「美術館にいる人が好き」という気持ちを三橋先生が肯定してくれたことが、小樽美術館に私がいる意味を与えてくれたと思っています。

現に、小樽美術館で働き、直接お客様からの感想を伺える私は今すごく幸せです。大学から芸術の勉強を始めた自分も、美術館が好きすぎてオタクっぽくなっちゃう自分も、「今のままでいいんだ！」と思えるのは、大学8年間の学びの賜物です。

今大学で学んでいる人たちも、「自分のままで努力するんだ」とい